岩手県　胆江地区消防組合消防本部

胆江地区消防組合消防本部
消防長　　菅　原　睦　夫

住民生活の安全確保を目指して

平成の大合併といわれる歴史的な転換期に際し、胆沢地区消防組合を構成する５市町村のうち４市町村が、隣接する江刺市と合併して奥州市が誕生しました。この合併に伴って、胆沢地区消防組合と江刺市消防本部が統合し、平成18年２月20日奥州市と金ヶ崎町による胆江地区消防組合としてスタートしました。

当消防組合は、水沢市、前沢町、金ヶ崎町、胆沢町及び衣川村の５市町村が、昭和46年に県下に先駆けて発足した消防一部事務組合でしたが、今回の統合により、管轄面積が、1,173.12km²の広さとなり、人口は約14万８千人、世帯数が約４万８千世帯と、人口・世帯数で県内２番目の規模となりました。

消防体制は、１本部、２署、４分署体制、職員数172名で、住民生活の安全確保を目指して消防救急サービスの充実に取り組んでいます。

ヘリポートを併設した水沢消防署前沢分署

えみしの英雄「アテルイ」の里

ここは、かつて数々の歴史ドラマが繰り広げられた奥州・日高見の国といわれ、約1200年前に、大和朝廷のえみし征伐に対し、平和で豊穣な北の大地を守るために戦ったえみしの英雄「アテルイ」の里として、古代から文化を共有する地域であり、奥州藤原氏が築いた平泉文化とも深い関わりのある地域でもあります。

また、管内のほぼ中央を南北に貫く北上川の流域と、奥羽山脈を水源とする胆沢川流域に開けた胆沢扇状地により広大な平野が形成され、古くから県南の穀倉地帯として知られています。近年は、稲作のほかピーマン、りんご、リンドウなどの農作物の生産が盛んで、特に、全国的なブランドとして人気が高い「前沢牛」の産地でもあります。

奥州市で行われる「日高火防祭」

このように、農業を基盤として第一次産業を中心に発展してきた地域ですが、近年工業団地の整備により大手企業が進出するとともに、新幹線や高速道路などの高速交通網の利便性を背景に商業集積が進み、伝統産業や基幹産業の事業展開が図られるなど、新たな時代に向けて地域の特性を生かしたまちづくりが進められています。

曹洞宗正法寺
（奥州市にある日本一の茅葺屋根）

管内は、比較的平坦な土地が多いことから、北上川流域の小規模な水害は数年おきに発生しているものの、近年においては全国的に知られるような大災害は発生していません。

しかし、最近各地で発生している異常気象がもたらす未曽有の災害や、近い将来発生する確率が高いとされる宮城県沖地震に備え、消防力の充実強化はもとより、危機管理体制の確立が必要なことから、本部の組織機構を見直し、消防課を消防救急課と予防課に分離し、消防救急課に危機管理室を設けるなど、消防体制の強化に努めています。

日本３大散居集落に数えられる胆沢平野

住民から信頼される消防

消防本部のある奥州市水沢区は、東京市長を務め、関東大震災直後の内相兼帝都復興院総裁時代に東京復興30億円計画を立案し、「大風呂敷」と言われた後藤新平の出身地です。郷土の先人の先見性に習って、先を見越した消防体制の充実を心がけ、平和で豊穣なるアテルイの里を災害から守りたい…職員一丸となって「住民から信頼される消防」を基本に、安心して暮らせるまちづくりに取り組んでいます。